

## ジェームズ・デニーの生涯と神学(四)

松浦義夫

### 序論

ジェームズ・デニー (James Denney) は、数多くの神学的著作を遺しているが、『新約聖書』の注解書以外の作品で、比較的組織的に書かれた作品としては、『神学研究』(Studies in Theology, 1894)、『キリストの死』(The Death of Christ, 1902)、『イエスと福音』(Jesus and the Gospel, 1908)、『和解論』(The Christian Doctrine of Reconciliation, 1917)の四作品が代表的なものと言えよう。この内、最後の作品、すなわち『和解論』は、彼の死後出版されたものである。『キリストの死』、『イエスと福音』が、ジェームズ・デニーの生前の「三部作」というように呼ぶことも出来るであろうかと考えられる。

ジェームズ・デニーの神学、および彼の著作を研究し、理解するためには、彼がそれぞれの作品を著す際に、どのような歴史的状況の下にあるか、という点を調査することは、きわめて重要になってくる。すなわち、彼の作品の「生活の座」を調査することは、彼の作品それ自体の持っている主張と、その今日の我々に対する意義を知る、重要な手掛かりを提供してくれるということである。

すでに、『神学研究』の内容に関する考察に着手したわけであるが、この作品のみを一個の作品として採り上げるのと、この作品を彼の「三部作」あるいは『和解論』も加えて、「四部作」の第一の著作である、というように採り上げるのでは、微妙な違いが生じるであろうということは、充分に予想される事柄であ

る。拙論の考察の方法としては、この『神学研究』を、ジェームズ・デニーの神学的思索の出発点、すなわち後に「三部作」ないし「四部作」として展開していく出発点として理解し、考察の対象とする立場を採用しようと同心掛けられたものである事をまず指摘しておきたいと考える。

ところで、ジェームズ・デニーが、これらの神学的作品を通して主張しようとした事柄は何であったのだろうか、また彼の神学における主題あるいは中心点とはどういう所にあったのだろうか。すでに『神学研究』に関しては指摘した事であるが、『神学研究』で中心的位置を占めるのは、「キリスト論」と、「贖罪論」である。また、これに続く作品である『キリストの死』は、『神学研究』で考察された「贖罪論」を、より具体的に詳細にわたって、『新約聖書』の積義的研究により展開させたものであり、さらにその後の作品である『イエスと福音』は、教会史における「信仰告白」の内容と、『新約聖書』の積義的研究により展開させた「キリスト論」に関する考察であるということを考える。すると、彼の神学における主張ないし中心点は、やはり、「キリスト論」と「贖罪論」であることが理解できる。この点に関しては、彼の死後出版された作品で

ある、『和解論』でも同様である。この作品は、『キリストの死』で採り上げられた積義的研究をさらに進めて、『新約聖書』後の教会史における「贖罪論」の展開を、より教理史的にまた組織神学的に考察したものである。

ところで、ジェームズ・デニーの神学が、なぜこのように、「キリスト論」と「贖罪論」を中心にしているのだろうか。『神学研究』には、この点に関してヒントとなるような表現があるので、ここでその箇所を引用することにする。<sup>1)</sup>

「これから私が採り上げようとしている主題を見れば気付かれるように、少なくとも初めの方の項目は、教会の神学において、歴史的に出現している順序に従って採り上げているということである。『キリスト論』が最初に来る。この主題は、初代教会における最大の主題である。そして、教会が東西に決定的に分裂する以前に、教会として宣言した主題である。この主題と、この主題に含まれたものとしての『三一論』の教理、これが最初に扱われる項目である。歴史的に見ると、次に登場するのが、ラテン(西方)教会、特に北アフリカの教会における、『人間論』である。アウグスチヌスは、この主題に関して、アタナシウスがキリスト

の『ベルソナ』に関する教理に関して果たしたのと同じような、歴史的に重要な役割を果たしているため、重要な位置を占めている。宗教改革とともに、最大の関心を引くようになった主題は、『贖罪論』である。人々は、一人の罪人が神の前でいかにして義と認められるのだろうか、という疑問に対する答えを求め続けていた。そして彼らは自分たちの求めている答えを、キリストの働きの中に見出した。信仰による義認は、和解者としてのキリストの働きと相関関係にある。そして、和解者としてのキリストの働きは、プロテスタント神学の、重要な主題である。これは、ルター派にも改革派にも共通している。このような歴史的経過を見ると、これから採り上げようとする主題の順序が、自然で作為的でないということが、示されるであろう。……その他の主題は、それ自身としては重要なものではあるが、教会において同程度に注目されたということとは、今までなかったものである……」。

以上の引用からも理解できるように、ジェームズ・デニーは、教会の歴史の中で採り上げられた最も重要な二つの主題である、「キリスト論」と「贖罪論」を、彼自身の生きている歴史的状況の中で、今一度採り上げ、考察し直そうと企てているわけである。

ジェームズ・デニーの生涯と神学 (四)

ところで、ジェームズ・デニーの教派的出自が、いわゆる「福音派」(Evangelicals)であることは、すでに考察したが、この「福音派」の神学的特色は、「贖罪論」の強調、すなわち宗教改革者たちの特色を、そのまま伝統として受け継いだものであるということである。ジェームズ・デニーが、この伝統を受け継ぎ、「贖罪論」を中心主題としつつも、そのみでなく、「キリスト論」的基盤に対しても明確な位置付けをしている点を注目すべきであろう。

キリストの存在を「そのものとして」教えるスコラ学の教説に対する反動として、ルターは「わたしのため」のキリストの贖いのわざを強調した。この場合でもルターはもちろん「キリスト論」的信仰告白の客観的意味を堅持した。しかし、メランヒトンでは、この「わたしのため」(pro me)という原理が、一面的に強調され、一五二二年の *Locci communes* には、その序文の中に、あの有名な一文、すなわち「キリストを知ることは、すなわち彼の恵みを知ることであり、彼の両性や受肉の形態を考察することではない」という表現によって示されている。この原理は、シュライエールマッハーの「キリスト論」の基礎となり、彼を経て「自由主義神学」の主張にも受け継がれた。現時点で

の救いの経験すなわち信仰の側から、キリストの事実の意味を考察する。ここでは「キリスト論」が「信仰論」にあるいは「救済論」に吸収される危険が存在する。

「キリストを知ることが、すなわち彼の恵みを知ること」であるが、そのキリストの働きが、何故に、またどのような道筋を通過して実現されたかを探求し、さらにその根本を尋ねて、「キリストが誰であるか」を告白しなければ、神学としての営みを為したことになるのではないであろう。その意味で、「キリスト論」と「贖罪論」とは、キリスト教神学にとって、表裏一体のあるいは相即不離の關係にある中心的主題といえるであろう。したがって、「キリスト論」と「贖罪論」を中心に置き、相互の關係を常に意識しつつ探求している、ジェームズ・デニーの神学は、言葉の真の意味での「正統的」(Orthodox)なまた、「福音的」(evangelical)な神学であるというように理解できるであろう。

## 第一章 史的イエスの問題

ジェームズ・デニーの神学が、「キリスト論」と

「贖罪論」を中心に展開されていることは、すでに指摘したわけであるが、そのことの理由として考えられる点は、第一には、ジェームズ・デニー自身も指摘しているように、「キリスト論」と「贖罪論」が、キリスト教神学の二つの主要な課題であったということに見出すことができよう。そして、第二の理由としては、彼の生きていた時代、すなわち、一九世紀後半から二〇世紀初めにかけての時代は、まさにこの二つの主題、すなわち「キリスト論」と「贖罪論」をめぐっての神学的論争が、新たな熱気を帯びて活発に展開された時代である、ということが指摘できるだろう。しかもその際、「キリスト論」と「贖罪論」は表裏一体となつて論じられているのである。

我々は、ジェームズ・デニーの神学の特色を考察するにあたって、まず、『神学研究』の考察をすることから着手したわけであるが、彼の指摘する、キリスト教神学の二つの主題である、「キリスト論」と「贖罪論」に関して、『神学研究』における、ジェームズ・デニー自身の考察の順序に従って、まず「キリスト論」から考察することにする。

ところで、すでに指摘したように、ジェームズ・デニーの神学は、彼がどのような歴史的状況の下にあつ

て発言しているか、という点を理解することにより、彼自身の主張もより明瞭になると考えられるので、彼の「キリスト論」を考察する際も、まずこの事柄、すなわち、ジェームズ・デニーの生きていた時代について、「キリスト論」に関して特にどのような事柄が論じられていたのかを、考察することとする。

ジェームズ・デニーは、いわゆる「イエス伝研究」が最も盛んであった時代、すなわち一九世紀に人生の三分の二を過ごしている。では、この「イエス伝研究」とは、一体どういうものであったのだろうか。

アルベルト・シュヴァイツァー (Albert Schweitzer) は、膨大な数にわたる、様々な「イエス伝研究」を調査し、『イエス伝研究史』(Geschichte der Leben-Jesu-Forschung, 1906, 1913) を著しているが、彼によると、「イエス伝研究」は、「ドイツ神学の最も偉大な功績」<sup>2)</sup>と評価されている。それは「単に歴史的な関心から出発したのではなく、ドグマからの解放者として歴史上のイエスを探求した」<sup>3)</sup>とされている。すなわち、「イエス伝研究」が主題としたのは、教会のドグマにより粉飾され歪められた、生命のない権威的なキリストから解放された、史的イエスの生き生きとした姿の復元を探求する、ということであっ

た。すなわち、「史的イエスの問題」が主題となったのである。この「史的イエスの問題」は、レッシング (G.E. Lessing) が一七七四年から七八年にかけて、ライマールス (H.S. Reimarus) の遺稿を『匿名者の断片』(Fragmente eines Ungenannten) として出版した時に始まったとされている。ライマールスはすでに後の時代の、イエスについての研究のあらゆる主題を、すなわち歴史上のイエスと信仰上のキリストとの区別、イエスの福音のもつ終末論的性格、イエスの教えの政治的性格、史的イエスの神の国宣教と初代教会の教えの区別の問題を先取りしている。<sup>4)</sup>

ライマールス以後、「史的イエス」の問題で注目しなければならぬのは、シュトラウス (D.F. Strauss) である。彼は一八三五年二巻からなる『イエス伝』(Das Leben Jesu, I, II, 1835—36) を書いたが、その中で、福音書の伝えるイエスは、現実のイエスを神話的神の子の姿に変形しているとし、イエスから一切の超自然的神話的象徴を取り除き、一人の貧しい人間としてのイエスを描き出した。彼から二つの途がひらかれた。一方は、福音書の神話的キリスト像の批判によって、イエスは多分まったく生存したことのない神話的存在であろうとの、「キリスト神話説」、もう一

方は、史的イエスは福音書のイエスと同じではないが、福音書の史的批判的研究によって史的に得られるものであるとして、数多く描かれた、「イエス伝研究」への途であった。先述したように、シュヴァイツァーは、この数多くの「イエス伝研究」を調査し、彼の『イエス伝研究史』にまとめたのであるが、彼により明らかにされたのは、研究者たちによって「史的イエス」として描かれたのは、実は個々の研究者の理念の反映以外の何ものでもないということである。彼によると「研究者たちは、誰でもかれらの思想をイエスの内に再発見し、それ以外にはイエスを甦らせることはできなかった。どの時代もそのようなイエスに慣れてしまっただばかりでなく、誰もが自分勝手にイエスを想像した」<sup>6)</sup>。かくて、合理主義者たちはイエスを道徳の教師として、社会主義者たちは貧しい者の友として、あるいは革命家、平和主義者、禁欲主義者など様々の姿のイエスが描かれたのである。

このような「イエス伝研究」の盛んな時代の最後にあつて、マルティン・ケーラー (Martin Kahler) は『いわゆる史的イエスと歴史的聖書のキリスト』(Der sogenannte historische Jesus und der geschichtliche, biblische Christus, 1892) を著わし、

福音書の描くイエスが、単に史的事実の報告としてではなく、使徒たちにとって意味のあつた、信仰の対象としてのキリストであることを明らかにした。時に、一八九二年のことである。さらにその後、史的批判的研究はさらに方法論的に進み、ついに「様式史研究」が出現した。この研究方法によって明らかにされたのは、福音書のイエスは、単に史的報告ではなく、初代教会の神学によって生まれた、信仰の表現であるということである。しかし、この「様式史研究」が出現したのは、ジェームズ・デニー以後のことであるので、我々としては、マルティン・ケーラーの研究によって明らかにされた、「史的イエスと信仰の対象であるキリストとの関係」の持っている問題性を指摘することによって、ジェームズ・デニーが、彼の『神学研究』以後の著作を著すに際して、その背景となっている、神学上の歴史的状况を考慮しているという前提に立って、彼の「キリスト論」を考察しなければならないであろう。

## 第二章 イエスとキリスト

神の創造の御業は普遍的であり、人類の救いの実現

を指している、という信仰からは、神の救いの御業もまた普遍的であるという信仰が必然的に生まれる。このように指摘したからといって、勿論、歴史的啓示というものの持つ重要性を、過小に評価すべき理由にはならない。人間が、信仰を持つに至るには、信仰を持つに至らせるような、何らかの具体的な神の行為の顕現、人間を捉えてはなさない具体的顕現を必要とする。勿論我々の認識を通り過ぎてしまった、様々な顕現ないし啓示も存在したであろうし、我々の知らない方法によって啓示されたのかも知れない。我々は、かの殉教者ユスチヌスとともに、それらの啓示の中においても、我々の信じる神のロゴスと同じロゴスが働いていたと信じる事が出来るであろう。ある時は、このロゴスが様々な理念を通じて、また無時間的な象徴によって、人々の心を捕えて来たであろう。しかしながら、『聖書』に基づく宗教においては、『歴史』が神の啓示の手段であり方法であると認識されて来た。

『旧約聖書』においては、神の救いの御業は、イスラエルに対する、歴史的型における摂理的対処において、特に、アブラハム以来イスラエルの民と神の間に結ばれた、救いの契約の更新の出来事という型によって啓示され、神の民であるイスラエルによって認識され信じられて来た。神は、たとえイスラエルの民が、神との契約を破棄し、偶像礼拝に逆戻りすることがあったとしても、神御自身は、常に一貫して、イスラエルとの関係回復の為の手段と方法を講じ続ける姿として表現されている。このような、神の救いの御業の啓示を具体的歴史において受けたという経験を通して、イスラエルの民には、神が、将来自らの民であるイスラエルに対して、顕に恵みを啓示され、民をその恵みで満たすために、決定的しかも具体的出来事を起こされるであろう、という希望が、すでに生まれていた。

『新約聖書』において主張されているのは、この神の救いの御業の頂点が、イエス・キリストにおける「歴史的啓示」によって、人類に対して明らかにされた、ということである。すなわち、「時が満ちるに及んで、神は、御子をお遣わしになった」。(ガラテヤ人への手紙四・四)ということである。キリスト教にとつては、まさにこの出来事が、根源的啓示であり、信仰の共同体である教会が、この啓示を土台として形成された。さらに、この共同体の後代における神認識の方向性、共同体自体の形体的整備の方向性を決定付ける契機となったのも、この出来事といえるであろう。すなわち、神の民であるイスラエルにおいて、「歴

史的啓示」として認識されてきた、諸々の出来事が、キリスト教会によって、自らの受け継ぐべき遺産の一部とされ、さらに、新しい決定的出来事として、「時の満ちるに及んで遣わされた」キリストにおいて、集約され、完成されたものとして認識されたのである。

「時の充満」は、神の創造の御業の完成の実現、すなわち、神の民を構成員とする神の御国建設のための、神の救いの御業の新しい決定的飛躍が起こる、人類の歴史における、決定的出来事、また契機として認識されたのである。こうして、イエス・キリストは、キリスト教信仰にとって、神による決定的また規範的啓示となったのである。あるいは、別の表現でいえば、イエス・キリストにおいて、神の啓示が凝縮され、この歴史の一点に神の啓示の焦点が合わされている、といえよう。

神の摂理の御業を表現するに際して、この「凝縮」あるいは「焦点」という捉え方は、イエス・キリストにおける神の啓示に対する我々の理解を表現するにも、有効な捉え方といえる。神の御業のすべてが、同等に評価されるということは、不可能である。勿論、神の御業はすべて、神の計画の道程に起こるわけではあるが、その中でも、いくつもの御業が他から抜きんでて

いるように受け取られ、人々を捕え、信仰を起こさせるように働く。いわば、神の御業が「凝縮」している出来事、神の御業の「焦点」ともいうべき出来事がある。このような出来事を、「啓示的出来事」と表現するわけである。そして『新約聖書』においては、このような、歴史における、神の御業の「凝縮」ないし「焦点」が、「時の満ちるに及んで」イエス・キリストにおいて顕に、人々の前に出現したと受け取られたわけである。しかし、ここで見過ごしてはならないのは、たとえ我々が「神の御業」と表現したり、神の御業の「凝縮」ないし「焦点」と表現したりする出来事も、日常の出来事と何ら変わらぬ姿を提示することがあり得るということである。しかも、このような、一見日常的出来事と受け取られる事柄が、ある人々には、特別な出来事、神の姿ないし性質の顕現する出来事、まさに「啓示」として受け止められるということの起こる可能性があるということである。

ところで、イエス・キリスト自身に関しても、同様のことが指摘できる。すなわち、イエス・キリストが、キリスト教会の信仰によると、神の摂理の御業の頂点、「凝縮」ないし「焦点」、「啓示」そのものだと受け止められたとしても、イエス・キリストにおける啓示以



外の神の御業が人々に受け止められる時の二面性が、この場合も可能性としては、否定できないわけである。

イエスの最初の弟子たちにとって、歴史的事実として存在したイエス、すなわち「ナザレのイエス」は、「父なる神」の「啓示」として現われた。すなわち、このイエスにおいて、「神」の存在と顕現が、凝縮され焦点を合わされているといい得る、特別な存在を見出したのである。そして、彼の最初の弟子たちの後継者である、キリスト教会も、彼の姿に神との特別な関係にある存在、すなわち、「キリスト」を見出したのである。

しかし、その同じ「ナザレのイエス」が、人類の一員にすぎない、というように看做される可能性もあつたわけである。実際、彼に対して何らかの関心を持った人々は、彼を神の啓示とは認めなくとも、例えば當時のローマ帝国の当局者たちのように、ローマの平和(Pax Romana)を脅かす存在と看做したのであり、また当時のユダヤ教当局者や一般民衆は、道徳の教師、ラビの一人、宗教改革者自称メシア、預言者の一人と、このイエスを、人々は、歴史的人物、興味ある存在であつたり、人類の生き方に対して何らかの示唆を

与える存在、場合によっては、心からの尊敬と敬服に値する存在とさえ看做して来たわけである。しかしそのようでありながら、決して、「神の救いの御業の焦点」というようには看做したわけではないのである。

そして、「神はキリストにおいて世を御自身と和解させられた」(コロサイ人への第二の手紙五・一九)と主張する人々、すなわちクリスチャンと呼ばれる人々は、このような公然と観察出来る歴史的現象をさらに越えて、自らが招き入れられた「信仰」を表現しているのである。すなわち、彼らがキリストにおいて見出した事柄が、何らかの方法で彼らに働きかけ、キリストにおいて、彼らに対する救いの御業を実現し啓示される「神」を見出した、と彼らが信じるように導いたのでという、彼ら自身の信仰を表現しているのである。

「キリスト教神学」は、「信仰」という観点に立つて論述をなす。したがって、「キリスト教神学」の扱う資料は、「神の啓示」としてのキリストから出発する。しかし、神学という学問が、「教会」における「信仰」の自己吟味、再確認であり、キリストにおいて啓示されたことにより与えられた、「信仰」の意義を明示しようと努める営みであるとすれば、「啓示」

自体と、この「啓示」の為の手段であり方法である「歴史的現象」との関係を明らかにしようとする努力を、常になさなければならぬ。すなわち、「イエス」と「キリスト」の関係を明らかにしなければならぬ。そのためにも、「史的イエス」を探索し続けなければならない。

イエスの最初の弟子たちにとっても、弟子以外の人々にとっても、同じ資格で接することのできた現象、すなわちこの「史的イエス」を探索し続けなければならない。結局のところ、イエスの最初の弟子たちにとっても、この「史的イエス」より出発しなければならなかったわけである。このように、一個の人間としての生涯を過ごしたイエス、しかもそのイエスを、弟子たちは、「神の啓示」であるキリストと受け止め信じた。この「史的イエス」より出発するというやり方で探求する「キリスト論」、いわば「下からのキリスト論」、あるいは「上昇型キリスト論」という、近年盛んに論議されている「キリスト論」の持つ真理契機も、けっして見過ごしにはできないであろう。ジェームズ・デニーの神学における「キリスト論」も、この「下からのキリスト論」という立場に近いといえる。

ところで、「史的イエス」の探求という問題には、既に述べたように、様々な困難が付き纏っているとい

うことに關しては、特に最近の新約聖書神学に係わる著作を読めば、誰しも気付くことであるが、そこで問題とされているのは、公然と観察される歴史的現象としてのイエスとは、具体的には、イエスのどういう姿であるのか、という点である。

ジェームズ・デニーの活躍し始めた、一九世紀において、学者たちが最も時間と労力を傾けて実行しようとした事柄は、「史的イエス」という歴史的現象を、『新約聖書』の伝えるイエス・キリストから、どのようにして抽出し再現するか、ということであった。その際、学者たちは、自分たちが「附着物」だと看做す事柄、すなわち弟子たちの伝えるイエス・キリストに附着している、「神話的」、「形而上学的」あるいは「神学的」要素を、イエス・キリストから引き剥がして、「史的イエス」に戻るということを主張した。後の教会のドグマによって鍍金され歪められる以前の、史実としての姿のイエスと、そのイエスの懐いていた原初のままの信仰に戻れ、というのが、いわば当時の合言葉だったわけである。そして既に述べたように、様々ないわゆる「イエス伝」が盛んに著され、アルベルト・シュヴァイツァーの『イエス伝研究史』によつて、「史的イエス」の探求が、結果的には失敗に終わっ

た、ということが示されたわけである。現在でも、イエスについてのいわゆる「純粹に史的な事実」を抽出することは、極めて困難であるとの認識が広く浸透しているようである。我々が「史的イエス」を明らかにしようとする時、使用することのできる、事実上唯一の情報源は、『福音書』ということになるのであるが、この『福音書』の伝えようとしている事柄は、文字通り「福音」、すなわち「このイエスという一個の人物において、神御自身が人類の所に来られ、救いを実現し、啓示されたのである、という宣言」であり、単にイエスの生涯の報告の記録ではないわけである。この点では、最も神学的と呼ばれる『ヨハネによる福音書』についてだけではなく、『共観福音書』についてもいえる事柄である。

今世紀に入り、時代的にはジェームズ・デニー以後に出現した、ブルトマンらによって提唱された、「様式的的研究」によって明らかにされたのは、「史的イエス」は、従来認識されて来た以上に、我々の認識の及ぶはるか彼方に退いてしまったということである。『福音書』において描かれているイエスや、彼に係わる出来事は、ごく控え目に表現しても、初代教会の信仰と教義によって極度に彩られている、ということである。

ある。すなわち、歴史的な一個の存在である「人間イエス」は、教会の信仰においては、歴史的な存在としてではなく、いわば「神話的」背景に立った存在として、神秘的な「神の子キリスト」という姿に変形させられてしまった、ということである。この神秘的な「神の子キリスト」は、天から下って来た先在の救済者であり、地上に寄留し、自らの死によって罪の償いをなし、死者の中より甦り、そこから下って来た元来の故郷である天に昇り、間もなく彼は雲に乗り再び地上に戻り、救いの業を完成させるというのが、人々の期待であった。『福音書』の中に描かれているイエスの物語は、このような神秘的姿の「神の子キリスト」という概念の光を帯びて伝えられているのであり、イエスをキリストだと信じた、後の教会の信仰が生前のイエスの生涯に遡って読み込まれているのである、ということである。例えば、ブルトマンの主張によると、イエス自身は、自らをメシアとは意識していなかったであろうし、このメシアという称号を生前のイエスに適用することや、イエス自身によって、それが受け入れられたとすることは、歴史的事実の正確な記述であるというより、後の教会の信仰をイエスに覆い被せたものである、ということになる。『福音書』に記述

されているイエスに関する、これ以外の多くの事柄も、歴史的事実として起こった出来事を表現している、というよりも、このイエスこそメシアすなわちキリストであるのだということ、証言し宣言するために記述されているのであるということである。

ブルトマンらによって提唱された「様式史的研究」は、『福音書』および『新約聖書』そのものの性質が、「信仰の書」である、という点を、より厳密な方法で明らかにした、という功績は、どのように評価しても、評価し過ぎることはないであろう。しかし、方法論的には恣意的とはいえず、この事柄は、すでにブルトマンより一世紀前に、シュトラウスが論じようとした事柄である。

「史的イエス」に対する懐疑的態度は、このように、現在に至るまで続いているわけであるが、既に述べたように、『聖書』に基づく宗教——キリスト教も勿論これに属するが、においては、「歴史」が神の啓示の手段であり方法であると認識されているかぎり、この「史的イエス」の問題は、けっして無視するわけにはいかないどころか、キリスト教信仰の生死を制する重大問題だといっても過言だとはいえないであろう。

ジェームズ・デニーは、このような、キリスト教信

仰にとつての重大問題が、最も活発に論議されている時代の真只中であつて、「キリスト論」及び「贖罪論」を著しているのである。(以下次号に続く)

注(1) Denney, J.: Studies in Theology. London, 1904, P22.

(2) Schweitzer, A.: Geschichte der Leben-Jesu-Forschung. Tübingen, 1913, P 2

(3) Ibid. P 4

(4) Lessing, G.E.: Die Religion Christi. Leipzig, 1902, P 518

(5) Schweitzer, A.: Geschichte, P 631

(6) Bultmann, R.: Theologie des Neuen Testaments. Tübingen, 1958, P27